



|     |     |     |     |    |     |    |     |
|-----|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|
| 梨   | 廿三  | 名考  | 廿三  | 秋の | 廿三  | 秋の | 廿四  |
| 一多  | 廿四  | 植の部 | 廿四  | 秋の | 廿五  | 秋の | 廿四  |
| 木樨  | 廿五  | 名考  | 廿五  | 秋の | 廿六  | 秋の | 廿五  |
| 蔓珠沙 | 廿六  | 名考  | 廿六  | 秋の | 廿六  | 秋の | 廿六  |
| 秋海棠 | 廿七  | 名考  | 廿七  | 秋の | 廿八  | 秋の | 廿七  |
| 縮の  | 廿八  | 名考  | 廿八  | 秋の | 廿九  | 秋の | 廿八  |
| 蓮の  | 廿九  | 名考  | 廿九  | 秋の | 三十  | 秋の | 廿九  |
| 桔梗  | 三十  | 名考  | 三十  | 秋の | 三十一 | 秋の | 三十  |
| あつ  | 三十一 | 名考  | 三十一 | 秋の | 三十二 | 秋の | 三十一 |
| 綿   | 三十二 | 名考  | 三十二 | 秋の | 三十三 | 秋の | 三十二 |
| うら  | 三十三 | 名考  | 三十三 | 秋の | 三十四 | 秋の | 三十三 |
| 桔   | 三十四 | 名考  | 三十四 | 秋の | 三十五 | 秋の | 三十四 |

Blank page with faint vertical lines, likely a separator or endpaper.



|      |     |      |     |     |     |     |     |
|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| ぬりこ  | 三十四 | 草    | 孟   | 石の葉 | 三十四 | かほ草 | 三十四 |
| 木犀   | 三十五 | 木の葉  | 三十五 | 常葉  | 三十五 | 槿のこ | 三十五 |
| 木の子  | 三十五 | 草    | 三十五 | 葉   | 三十六 | 熟柿  | 三十六 |
| 虫    | 三十七 | 秋の蟬  | 三十七 | 葉   | 三十七 | 秋の葉 | 三十七 |
| 秋の蟻  | 三十七 | 秋の蚊  | 三十七 | 葉   | 三十八 | 足   | 三十八 |
| さうりす | 三十八 | さうりす | 三十九 | いやく | 三十九 | 蟻   | 三十九 |
| いやく  | 三十九 | いやく  | 四十  | 雁   | 四十  | 雁   | 四十  |
| せき   | 四十  | 鴨    | 四十  | 木つぎ | 四十  | つぎ  | 四十  |
| つぎ   | 四十一 | 鴨    | 四十一 | つぎ  | 四十一 | つぎ  | 四十一 |
| つぎ   | 四十二 | 鴨    | 四十二 | つぎ  | 四十二 | つぎ  | 四十二 |
| つぎ   | 四十三 | 鴨    | 四十三 | つぎ  | 四十三 | つぎ  | 四十三 |
| つぎ   | 四十四 | 鴨    | 四十四 | つぎ  | 四十四 | つぎ  | 四十四 |

十人五白歌向糸

穰之部

南穂 暎旭菴墨足 行無慮瓜少 校合

名月

名月や池をぬりておきか  
 ぬ月や門をぬりておきか  
 三井ちの門をぬりておきか  
 名月や池をぬりておきか  
 ぬ月や門をぬりておきか  
 三井ちの門をぬりておきか  
 名月や池をぬりておきか  
 ぬ月や門をぬりておきか  
 三井ちの門をぬりておきか

其角 嵐雪



明

名もやは標よりよりを燕のひかり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 名もやはゆるりたる標もゆるり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 明もや標もゆるりたる標もゆるり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 明もや標もゆるりたる標もゆるり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 明もや標もゆるりたる標もゆるり

杏  
 桃  
 梅  
 李  
 梨  
 橘  
 柿  
 栗  
 松  
 楓  
 柏  
 杉  
 柳

名

名もやは標よりよりを燕のひかり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 名もやはゆるりたる標もゆるり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 明もや標もゆるりたる標もゆるり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 明もや標もゆるりたる標もゆるり  
 明もや老無明の標もゆるり  
 明もや標もゆるりたる標もゆるり

杉  
 松  
 楓  
 柏  
 栗  
 梨  
 李  
 梅  
 桃  
 杏  
 柳  
 橘  
 柿  
 梨  
 李  
 梅  
 桃  
 杏  
 柳



見 ぬ

聖御しし人を体とぬらんか  
 憂ふかううううと書てぬらんか  
 衆人とあはれむかしてぬらんか  
 蜀黍の葉をまぬらんかぬらんか  
 川原の鳥をまぬらんかぬらんか  
 麻かきを踏折る人のぬらんか  
 ちりけの歌をうたぬらんかぬらんか  
 舟の道にうたぬらんかぬらんか  
 海にのこるやうなぬらんかぬらんか  
 何ふかうううのあてもぬらんか  
 ぬらんかぬらんかぬらんかぬらんか

去来 聖賢 山采 杉風 源化 支考 出學  
 尚白 畧費 越人

ぬ

不ぬ影やまゝ、行形もやぬぬぬ  
 之ぬ人のまゝ麻の種や秋のこゝ  
 雲霞やまゝまゝひらゝぬぬぬ  
 妙くくまゝまゝぬぬぬぬぬぬ  
 分るをまゝぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 山ままぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 岸ままぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 思ふぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 けまぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 うす縁をまぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

舟 尚白 畧費 越人 山采 杉風 源化 支考 出學



沙

三  
口  
お

たつわやむうふに家のおまを  
おまを神と目おなまありぬ神の  
さうわとてゆく二言のたつわ  
んま人もまのぬまのたつわ  
おまを以て神のまうわぬぬぬ

おま  
おま  
おま  
おま  
おま

何事かの人とてにも何れふのぬ  
三よのぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
さうわとてぬぬぬぬぬぬぬ  
さうわとてぬぬぬぬぬぬぬ  
さうわとてぬぬぬぬぬぬぬ  
さうわとてぬぬぬぬぬぬぬ

おま  
おま  
おま  
おま  
おま

徳  
香

徳香のぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬ  
ぬぬ  
ぬぬ  
ぬぬ  
ぬぬ

十のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬ  
ぬぬ  
ぬぬ  
ぬぬ  
ぬぬ



十の友 海の時

此よりひらきあしうはさきく其のるを  
 勿れよ心まきあやのあひまうり  
 心まきひらきあやのあひまうり  
 十のあやあやのあひまうり  
 心まきひらきあやのあひまうり  
 十のあやあやのあひまうり  
 心まきひらきあやのあひまうり  
 十のあやあやのあひまうり

大東  
 明ぬ  
 乙中  
 作不  
 多輝  
 三羽  
 支考  
 西考  
 海考  
 大東

星の夜

此よりひらきあしうはさきく其のるを  
 勿れよ心まきあやのあひまうり  
 心まきひらきあやのあひまうり  
 十のあやあやのあひまうり  
 心まきひらきあやのあひまうり  
 十のあやあやのあひまうり  
 心まきひらきあやのあひまうり  
 十のあやあやのあひまうり

大東  
 明ぬ  
 乙中  
 作不  
 多輝  
 三羽  
 支考  
 西考  
 海考  
 大東



新田

其の老朽ぬき本や古くは  
通々の格に結尾冊と新田

梨の  
杉候

文

文の中より最も常の夜も似  
ぬるものやひくういあり根の子

其  
其

葉

いの中より最も常の夜も似  
ぬるものやひくういあり根の子

千子  
去来

葉

お草も白くははれすたれり  
志す葉のとりやうはねり  
葉のたのききとてしぬる

泥足  
金屋  
何化

秋 砂

砂粒の中より最も常の夜も似  
ぬるものやひくういあり根の子  
中子の病もとりやうはねり  
たの秋や古き樹の安あり  
ひくういあり根の子  
秋きつの中より最も常の夜も似  
ぬるものやひくういあり根の子  
秋きつの中より最も常の夜も似  
ぬるものやひくういあり根の子  
秋きつの中より最も常の夜も似  
ぬるものやひくういあり根の子  
秋きつの中より最も常の夜も似  
ぬるものやひくういあり根の子

新  
嵐雪  
尚尔  
之道  
男貴  
北後  
茶  
西  
何  
何  
何



七又

立  
琴

昔の船中より針を定むるはめのお  
母の言をたゆみしつらやまむくも  
針もよき七又の夜の明なすし  
七又の中は川に流すはすは  
ふもはちかたは流すはすは  
すまを和歌を流して桐子入  
大内のおききまおきま  
おきまを流して桐子入  
すまを和歌を流して桐子入

其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角

て川

静  
榜

頭  
の  
糸

大切な船を明あかりて川  
はのお中をぬりてのりては  
け界へ流すそとてはあはの川  
流すはのりて流すはのり  
あはのりて流すはのり  
流すはのりて流すはのり

静の船は流すはのりて川  
かたまたの流すはのり  
け界へ流すそとてはあはの川  
流すはのりて流すはのり  
あはのりて流すはのり  
流すはのりて流すはのり

其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角

其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角



千 蘭 盆 櫻 待 言 灯 曼

金魚のうろたへたるを言にありけり  
 空あふとて言りけりかきやも魚のうろ  
 美をよぶの仙傳ふ金魚のけりま  
 うらわ人の中家の言を言ふ美を言  
 櫻待や久のききたる家のものも言  
 言ふ言ひのうろ人言を言ふ言ひ  
 君志馬の櫻待の傳子も言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ

椿子  
 白雲  
 玉雲  
 田節  
 野風  
 信似  
 梅小  
 多那  
 探也  
 蓮之

竹 養 正 鐘 送 中

見人をもつて竹養ままり言ひ  
 白雲の久し言ひ言ひ言ひ言ひ  
 竹を切養に言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ  
 言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ言ひ

其角  
 岩公  
 木因  
 岩を  
 末陽  
 山を  
 嵐若  
 字之  
 史部  
 柳江  
 陽因



云見

糸

玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて

玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて  
玉の光りも焼塔の光りも  
しるしとてしるしとて

棚 経

蓮 飯

精進の好み  
賞時に  
魂の奥  
光の影  
はるるの人

相経の  
光の影  
はるるの人  
相経の  
光の影  
はるるの人

大菜  
菜瓜  
冬菜  
白明

大菜  
菜瓜  
冬菜  
白明



墓 諸

生

身

魂

金 身  
ね

家より皆杖子志く擧げの墓を築  
及し人も強子に好むてとらへ  
血泣きを死の穢れや墓を築きて  
灯籠の形に墓を築く人の子に世

生身魂の生るる如く親より  
世めて息の骨より生れ生れ魂  
たのめらるるては生れ生れ度  
かまらば玉子の心は生れりむ

踊るゝよほとよ破て金の中  
金身も舞をたのめをさぎら  
何人の名ぬらぬも志く踊る

乃

云

其

一

其

方

没

是

生

其

既

相 撲

よれおの孫子の中へや角力取  
却もも経ちてアアとすむひを  
角力取ありや角力の如くいふ  
十八とすもゆりかきをさすひ取  
中事く老後を舞ひや角力取  
憎むおきてそ名を舞いずすひと  
角力取の舞ひの名子経ちりり  
相撲の舞の白ひり角力取  
相撲もその先をさすすすひと  
貫おれし子もあはれ角力取  
あつて舞子もあはれ角力取  
かあらのいふを先いり角力取

其

角

力

取

舞

子

中

へ

や

角

力

取

の



蜂 風

安んじし日老は世に形くも林の風  
牛形な子紋の美よあはれ蜂乃風  
かゝるゝあはれあゝ遠くあまの風  
秋風も志くあゝるゝに慈たう〜  
昔の昔もあはれあゝるゝ秋乃風  
梅の梅もあはれあゝるゝ秋乃風  
秋乃風の七重伽藍塔のあめ  
蜂乃風のあゝるゝあゝるゝの歌  
料亭に〜つゝあゝるゝあゝるゝの風  
物汁やあゝるゝあゝるゝ秋乃風  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの秋乃風  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの風

あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ

蜂 風

一ちりや蜂人あゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの

あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ

あゝるゝあゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの  
あゝるゝあゝるゝあゝるゝの

あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ  
あゝるゝ



名火残署

てあうらひ大男の如きひるま  
 けはるるはまゝいふるは火うら  
 ちうたう、残あきりあはれ火ひ  
 川はらわら大の半もきうら  
 亡月人の無き九はれ火うら  
 するたうらあや志あきりし

あうらひのそとくこはるる  
 秋もやう、はるきりしはあつさ  
 子もあつさ、はるきりしはあつさ  
 夕暮も秋もあつさ、はるきりし  
 松もあつさ、はるきりしはあつさ

其角  
 秋寂  
 秋寂  
 秋寂  
 秋寂

曲翠  
 乙生  
 乙生  
 乙生  
 乙生

秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし  
 秋風や稲刈りもあつさ、はるきりし

子尹  
 子尹  
 子尹  
 子尹  
 子尹



神子

神子

捨因

神子

神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の

其子  
小春  
尚也  
月元  
神子  
嵐雪  
神子  
神子

神子

神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の  
神子の志をいふ風の志は神子の

神子  
神子  
神子  
神子  
神子  
神子  
神子  
神子  
神子  
神子



雨物

雨物や二席をとおうはくのみま  
ぬきしらのみちやまのふじり  
秋のやまの東のふもさうすのふま  
あつこくおまをえんはまの半

添巻  
北境  
小湊  
芦角

後の  
舞入

けお入をのりて京の踊りぬ  
やま入や舞子も鳴もあしと  
あふ入や舞子まじりて判の強

許六  
魚斗  
一江

二言  
十也

からくぬや二言十也のひつあ  
こり十也二言十也にぬあひと  
風まらぬ柳も二言十也にぬ

去路  
七里  
好味

稲  
あ

稲あや二言のひつあ  
いぬつり子情ぬ人のさうは子  
稲あやまらぬやまらぬやまらぬ  
いぬつりぬのひつあ  
いぬつりぬ二言十也にぬあ  
稲あや物もあつてままをぬ  
いぬつりぬ二言十也にぬあ  
稲あやまらぬやまらぬやまらぬ  
いぬつりぬのひつあ  
稲あや物もあつてままをぬ  
いぬつりぬ二言十也にぬあ  
稲あやまらぬやまらぬやまらぬ  
いぬつりぬのひつあ  
稲あや物もあつてままをぬ  
いぬつりぬ二言十也にぬあ

其角  
去路  
和及  
稲及  
王ん  
燕雀  
山言  
そん  
る物



分 野

持もまのれにけしめりてふらぬ  
安れしてまを海也くのまけひ  
一まのれにけしめりてふらぬ  
おあめやめをふらぬふらぬ  
あめをふらぬふらぬふらぬ  
けしめりてふらぬふらぬ  
清のまをふらぬふらぬ  
能のまをふらぬふらぬ  
日初るけしめりてふらぬ  
湯りあうのまをふらぬ  
右のまをふらぬふらぬ  
月つりてふらぬふらぬ

まのれ  
持飯  
けしめり  
あめ  
一英  
清  
能  
日初  
湯り  
右  
月つり

早 籠 足 籠

早籠のまをふらぬふらぬ  
すくすくまをふらぬふらぬ  
まをふらぬふらぬふらぬ  
あめをふらぬふらぬ  
まをふらぬふらぬ  
まをふらぬふらぬ  
まをふらぬふらぬ  
まをふらぬふらぬ  
まをふらぬふらぬ  
まをふらぬふらぬ

まのれ  
すくすく  
ま  
あめ  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま



本 糸 取

暁 編

田 列

本糸やと作跡の山をるの雲  
おののくも取神のぬらぬり  
糸のふ一本糸を獲るは所なり  
新のくわおきまは代のくらの言  
里のふも鼻よりおる本糸は

暁編を獲かりしは州結  
乃ちくちの晴さぬさくかろふ  
編くく妙子もむさくあひ  
根のけくくを中法暁編の  
すくくもあくくはくく

其角  
流  
下  
暁  
山  
水

山  
水  
水  
水  
水

焼 子

焼 子

送 入

神 神

焼子あや高くくく那くく近高  
わちあや高くくくくく

そのくくは焼子の完くく  
唐拒をくくくくく

送入や指の障も障くく  
くくくくくくくく

神神や神の神くくく  
くくくくくくくく

史那  
守

史那  
守

馬  
梨

神  
神  
神



八種 通約 壽約

八種子欲のたて五一縛の如  
きつるや百のとも徳のや  
い初や通約の足を引きつり  
いしくや出の志のあはせに

瓜裂も徳のすくや通約は  
約むらじきほけりくもけ  
以取も徳をよきとし約むらじ  
極ゆるき徳あまの流や通約  
一の戸や衣のゆるし約むらじ  
約あや岩のゆるし約むらじ  
約衆のゆるし約むらじ

許六  
舎衆  
乙中  
起波

為号  
西条  
甘め  
許六  
去来  
其角  
玄学

紋生 年 鳴子 延美

れも衆はゆるしあまの流や通約  
尾をゆるしあまの流や通約  
徳のゆるしあまの流や通約  
山や通約あまの流や通約

さるさるの押あはしめ延美  
延美あまの流や通約

あまの流や通約  
延美あまの流や通約  
延美あまの流や通約

松屋  
中  
堂破  
乙由

肩  
立

具角  
大  
可



室山子

世新しも形も移めぬ室山子  
道らるる捨て置けぬ室山子  
物をもの儀もさるる室山子  
乞食ももれぬ室山子  
居風名の下やかしの身の知れぬ  
物の心をひくきと室山子  
はくまの心もかしの心  
経烟をかしの橋のつれぬ  
一徳もさるるかしの心  
山室を離るる室山子  
遊ぬるも捨て置けぬ室山子

山室  
捨  
室  
山  
室  
子  
山  
室  
子  
山  
室  
子  
山  
室  
子

引板

引板

引板

夫山の麓を引板乃き  
又山に世を引板乃き  
時を引板乃き書も引板

引板  
乃  
引  
板

引板乃き山向の心  
引板乃き心向の心  
引板乃き心向の心  
引板乃き心向の心

引板  
乃  
引  
板

引板乃き心向の心  
引板乃き心向の心  
引板乃き心向の心  
引板乃き心向の心

引板  
乃  
引  
板



葉

啼鳥在急のそとわたりて葉  
えきもあつたてはけりわらわの  
形代の果あはれしわらわの葉

大葉  
形代  
白貴

神

その鏡や市の中を過るは神  
神をまわつた代の方の鏡言ふ  
まのまの鏡をまわつた  
神鏡子傳長もまをまわつた

神鏡  
神鏡  
神鏡

鏡

約あまは鏡の鏡子ち方の鏡  
鏡妻のまのまの鏡  
まのまの鏡のまのまの鏡

まのまの  
まのまの  
柳皮

河

かたはりの鏡や鏡の下世を  
いふまの鏡もすく河集の

河集  
河集

鏡

てはつた早もをたのまの鏡  
鏡子一はつたのまの鏡のま

山公  
山公

足

足はれはるを足世のまの鏡  
まの鏡の中をまの鏡のま

足世  
足世

海

海を舟や入るまの鏡のま  
まの鏡やあつた世のまの鏡  
海を舟や入るまの鏡のま

舟を  
舟を  
舟を



# 新市

新市は子伝の武士きやうの  
 中守の新市はあつた下り  
 新市は子伝の武士きやうの  
 中守の新市はあつた下り

新市  
 柳市

新市  
 大市

新市は子伝の武士きやうの  
 中守の新市はあつた下り  
 新市は子伝の武士きやうの  
 中守の新市はあつた下り

新市  
 山市  
 新市

# 橋

橋は子伝の武士きやうの  
 中守の橋はあつた下り  
 橋は子伝の武士きやうの  
 中守の橋はあつた下り

橋市  
 一井  
 橋市



漸 之 朝 夜 寒

秋の夜更けの涼しき夜に  
静かに寝る人の心も静か

以野

秋の夜更けの涼しき夜に  
静かに寝る人の心も静か  
静かに寝る人の心も静か  
静かに寝る人の心も静か

寂寥  
思愛  
平考  
無の

入麩の下葉はは夜更け  
静かに寝る人の心も静か  
静かに寝る人の心も静か  
静かに寝る人の心も静か

菊  
大草  
以野  
西考

客人の夜更けの涼しき夜に  
静かに寝る人の心も静か  
静かに寝る人の心も静か  
静かに寝る人の心も静か

程已  
思風  
事由  
支考  
曠止  
似代  
丹芝  
巴部  
在哉  
字之  
百解



# 新 橋 湯 酒

足安亭亭亭亭亭亭亭亭亭亭亭  
 新橋の湯酒の人の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒

具舟  
 嵐雪  
 現舟  
 岩谷  
 志孝  
 遠若  
 柳若

湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 湯酒の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒

湯酒  
 湯酒  
 湯酒  
 湯酒  
 湯酒  
 湯酒  
 湯酒  
 湯酒

# 兵 交 産

兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒  
 兵交産の湯酒の湯酒の湯酒の湯酒

去来  
 許六  
 湯山  
 李下  
 以指  
 好去  
 予台  
 明久  
 史琴  
 石舟



種 乃 春

枯枝にゆく... 秋の暮... 秋の夕... 秋の夜... 秋の朝... 秋の雨... 秋の風... 秋の雲... 秋の月... 秋の星... 秋の露... 秋の雪... 秋の氷... 秋の霜... 秋の霰... 秋の雹... 秋の雷... 秋の電... 秋の虹... 秋の霞... 秋の霧... 秋の霾... 秋の塵... 秋の埃... 秋の沙... 秋の石... 秋の土... 秋の草... 秋の木... 秋の葉... 秋の花... 秋の果... 秋の實... 秋の種... 秋の穀... 秋の糧... 秋の食... 秋の飲... 秋の衣... 秋の履... 秋の居... 秋の行... 秋の止... 秋の住... 秋の生... 秋の死... 秋の運... 秋の命... 秋の魂... 秋の魄... 秋の精... 秋の神... 秋の靈... 秋の鬼... 秋の怪... 秋の妖... 秋の魔... 秋の怪... 秋の妖... 秋の魔... 秋の怪... 秋の妖... 秋の魔...

種 乃 春  
才 度  
其 角  
光 重  
古 著  
秋 人  
一 作  
名 之

持

秋の暮... 秋の夕... 秋の夜... 秋の朝... 秋の雨... 秋の風... 秋の雲... 秋の月... 秋の星... 秋の露... 秋の雪... 秋の氷... 秋の霜... 秋の霰... 秋の雹... 秋の雷... 秋の電... 秋の虹... 秋の霞... 秋の霧... 秋の霾... 秋の塵... 秋の埃... 秋の沙... 秋の石... 秋の土... 秋の草... 秋の木... 秋の葉... 秋の花... 秋の果... 秋の實... 秋の種... 秋の穀... 秋の糧... 秋の食... 秋の飲... 秋の衣... 秋の履... 秋の居... 秋の行... 秋の止... 秋の住... 秋の生... 秋の死... 秋の運... 秋の命... 秋の魂... 秋の魄... 秋の精... 秋の神... 秋の靈... 秋の鬼... 秋の怪... 秋の妖... 秋の魔... 秋の怪... 秋の妖... 秋の魔...

持  
海 中  
其 角  
光 重  
古 著  
秋 人  
一 作  
名 之



菊

菊の香は秋の味を知らしめぬ

秋の味

利未

利未の香は秋の味を知らしめぬ

秋の味

名

名は秋の味を知らしめぬ

秋の味

貴

貴は秋の味を知らしめぬ

秋の味

秋の

秋の味を知らしめぬ

秋の味

秋 雨 象 引

秋の味を知らしめぬ

秋の味



一景 柳 影

一景として水邊に柳のあざむく  
影をたづねては柳のこぼれ  
柳の影をたづねては柳のこぼれ  
柳の影をたづねては柳のこぼれ

影のたづねて中かろふ柳の  
影のたづねて中かろふ柳の  
影のたづねて中かろふ柳の  
影のたづねて中かろふ柳の

廿四

尚公  
明  
延  
鬼  
石

石  
土  
土  
土  
土  
土

草 九 花

草のたづねて中かろふ柳の  
草のたづねて中かろふ柳の  
草のたづねて中かろふ柳の  
草のたづねて中かろふ柳の

花 九 草

花のたづねて中かろふ柳の  
花のたづねて中かろふ柳の  
花のたづねて中かろふ柳の  
花のたづねて中かろふ柳の

草  
花  
花  
花  
花  
花

花  
草  
草  
草  
草  
草







報 顔

葦や草を鑽おらす門の松  
柳や其の石の花の歌  
あさくちやあつゆさうし  
野の石  
野の石のまじりぬまの  
い  
葦や草を鑽おらす門の松  
あさくちやあつゆさうし  
野の石  
野の石のまじりぬまの  
い  
あさくちやあつゆさうし  
野の石  
野の石のまじりぬまの  
い

杉風 史邦 巴都 和乃 平交 木因 才磨 柳若 多岐

葉 秋 葦 葉

柳をさすつらつらと  
葦や草を鑽おらす門の松  
あさくちやあつゆさうし  
野の石  
野の石のまじりぬまの  
い  
あさくちやあつゆさうし  
野の石  
野の石のまじりぬまの  
い

柳若 多岐 史邦 和乃 平交 木因 才磨 柳若 多岐



秋

志す者もあやふみ秋のこぼりし  
秋の香のあつく花の陣こつね  
鳴りかたも秋よめも無の事  
その声よつねりまじり秋の香  
踏みしめたりし秋のこぼり  
山秋の落葉をかきとれりし  
啼きよきし秋のこぼりし秋のこぼり  
上清も金木のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
下掃て置てし秋のこぼりし秋のこぼり

菊  
青葉  
栗  
萩  
言  
柳  
竹  
魚  
大

秋

秋

秋風のりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり

秋風のりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり  
秋のこぼりし秋のこぼりし秋のこぼり

菊  
青葉  
栗  
萩  
言  
柳  
竹  
魚  
大

菊  
青葉  
栗  
萩  
言  
柳  
竹  
魚  
大



椒 薑 乃 糖

しらの地の所なり糖の糖  
向家の山を好む糖の糖  
厚くその糖を好む糖の糖  
糖所の山を好む糖の糖  
糖風を好む糖の糖

土厚  
山厚  
糖厚  
糖厚  
糖厚

糖くてもその糖を好む糖  
糖の山を好む糖の糖  
糖の山を好む糖の糖  
糖の山を好む糖の糖  
糖の山を好む糖の糖

山厚  
糖厚  
糖厚  
糖厚  
糖厚

瓜 瓜

瓜の山を好む糖の糖  
瓜の山を好む糖の糖  
瓜の山を好む糖の糖  
瓜の山を好む糖の糖  
瓜の山を好む糖の糖

瓜厚  
瓜厚  
瓜厚  
瓜厚  
瓜厚







薄

紫  
荒

志る言のほれりてはしるはひ  
つたききと階子つとぬくあはれ  
年くは古根のきまをたうぬ  
ふたすたたはしききおれぬ  
ふれ解のぬのりもすたぬぬ  
鹿あてききぬすもあきま  
約實にぬじふぬくのきくの  
船ひきの一様ちりすたぬぬ

七とんきんうやきき紫のぬのぬ  
西勢あててうやき紫人のぬぬぬ

其角  
嵐を  
修水  
牧亭  
為有  
吉来  
野亭  
半版  
極事  
る所

紫  
葉  
心  
界

世もあてぬとあてぬのぬぬぬ  
牛ぬてぬぬぬぬぬぬぬぬ  
きき紫のぬぬぬぬぬぬぬ  
ゆきもぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

あてぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

折藤  
ぬぬ  
巴都  
野亭  
吉来  
石玉  
半版  
為有  
高段  
吉来



風

鶯

技折戸子蒲の音あり風心とし  
し船の舟中も体一似れり  
風心は元如くしる春の美

珠海  
中節  
る

鶯の舟中も春は針程あり  
枝のあしき物しお鶯既に  
しんやうやあまうと垣は林の体  
夕のあしき物もあしき  
鶯の舟中も春は針程あり  
しんやうやあまうと垣は林の体  
夕のあしき物もあしき  
鶯の舟中も春は針程あり  
しんやうやあまうと垣は林の体  
夕のあしき物もあしき

了年  
車庫  
巴都  
ま  
る  
る

鶯  
花

おもしろくも少なきのさきわ  
おもしろくも少なきのさきわ  
おもしろくも少なきのさきわ  
おもしろくも少なきのさきわ  
おもしろくも少なきのさきわ

其  
少  
体  
風  
片

鶯の舟中も春は針程あり  
枝のあしき物しお鶯既に  
しんやうやあまうと垣は林の体  
夕のあしき物もあしき  
鶯の舟中も春は針程あり  
枝のあしき物しお鶯既に  
しんやうやあまうと垣は林の体  
夕のあしき物もあしき  
鶯の舟中も春は針程あり  
枝のあしき物しお鶯既に  
しんやうやあまうと垣は林の体  
夕のあしき物もあしき

其  
少  
体  
風  
片  
其  
少  
体  
風  
片



廿七  
美結

川船わさうしほきくさ人のいれ  
気をもりて船ゆく逢ふ花の母  
けさの結ゆさくさのちもあめ  
あのおわ鳥あそくさ美のち後

龜子  
小枝  
改直  
大草

美

美の香もなまじり昔の庭  
庭のうらうらあはれ南の空多し  
美の香もなまじり昔の庭  
美をこく志美そのおのちもあめ  
かきうら秋をのこさ美のち後  
かきうら秋をのこさ美のち後  
物さしのかかき美の南のち後

海  
共車  
光空  
支考  
卯七  
あ山

りあもあうさ美ゆさくさ美のち後  
余のちのちもあはれ南の空多し  
美の香もなまじり昔の庭  
美をこく志美そのおのちもあめ  
かきうら秋をのこさ美のち後  
かきうら秋をのこさ美のち後  
物さしのかかき美の南のち後

二名  
和存  
支考  
白  
秋又  
曉龍  
支考  
巴太  
支考  
支考  
支考



尾花

あつ種を推してんをうはげをた  
ひくくしと種をたてたうたはあか  
ひのりてさきもあかたはあか  
雲のたかくたきもあかたはあか

尾花  
巴道  
古く  
る印

末枯

末枯の馬も解くふく山たの  
くら枯の中はあかたはあか  
くたうたはあかたはあか

其角  
一山  
る印

馬瓜

馬瓜の中はあかたはあか  
あかたはあかたはあか

山  
馬瓜

葛

あつ種を推してんをうはげをた  
ひくくしと種をたてたうたはあか  
ひのりてさきもあかたはあか  
雲のたかくたきもあかたはあか

葛  
府重  
故定  
越え  
柳花

梅

あつ種を推してんをうはげをた  
ひくくしと種をたてたうたはあか  
ひのりてさきもあかたはあか  
雲のたかくたきもあかたはあか

梅  
かま  
張道

女

あつ種を推してんをうはげをた  
ひくくしと種をたてたうたはあか  
ひのりてさきもあかたはあか  
雲のたかくたきもあかたはあか

女  
聖經  
あか



芋

芋の葉や根は毒屋のやきや  
山畑の芋あつたあつた  
つたの葉は芋の葉は物  
子をためて芋焼くをいさひ

海  
山  
其  
其  
芋  
芋

らり  
葉

らり葉の葉はまて芋の葉は  
葉の葉はぬすの申の申の

初  
尚

か  
葉

か葉の葉はぬすの申の申の  
か葉の葉はぬすの申の申の

猿  
夢

木  
屏

木屏の葉はぬすの申の申の  
木の葉はぬすの申の申の

嵐  
舟

木  
の  
葉

木の葉はぬすの申の申の  
木の葉はぬすの申の申の

葉  
尺  
此  
多

葉  
の  
葉

葉の葉はぬすの申の申の  
葉の葉はぬすの申の申の

其  
其  
其

板  
の  
葉

板の葉はぬすの申の申の  
板の葉はぬすの申の申の

其  
其  
其



# 草

杉草の葉は木の葉の如く竹  
草の葉は竹の葉の如く秋の葉  
松草の葉は松の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く

草  
松  
竹  
杉  
草  
草  
草  
草

# 草

草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く  
草の葉は草の葉の如く

草  
草  
草  
草

# 栗

# 熟柿

栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く

栗  
栗  
栗  
栗

栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く  
栗の葉は栗の葉の如く

栗  
栗  
栗  
栗

熟柿の葉は熟柿の葉の如く  
熟柿の葉は熟柿の葉の如く  
熟柿の葉は熟柿の葉の如く  
熟柿の葉は熟柿の葉の如く  
熟柿の葉は熟柿の葉の如く  
熟柿の葉は熟柿の葉の如く  
熟柿の葉は熟柿の葉の如く

熟柿  
熟柿  
熟柿  
熟柿



葉紅

葉紅

分の色あまうひはけしあけあり  
さあねらまはる貴といふもの  
物の舞もやまゑさうのすうね

からかきて葉を屋に掃きいふ  
お冬の物程もあつたお葉を  
萩の中み目のいろはのすも  
猿の目えうあうすお葉あう  
たうやお葉をさぬまのえさ  
北山のふものおうこのも  
ちほふうまをさうたお葉

巨椀  
あま  
あま

其角  
支考  
一欠  
し生  
柳水  
入楚  
而

虫

秋  
蟬

虫さうそ中をさうし中の中  
あうあうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中  
さうさうし中をさうし中の中

あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ  
あまのうらみとあまのうらみ

乙  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ



秋の 樹 葉 情 愔

悲はくきけき悲の秋の情  
其の如きすたる秋の情

秋の情  
如の類

秋の情の如きすたる秋の情

一笑  
作破

秋の情の如きすたる秋の情

四友  
葉の類

秋の情の如きすたる秋の情

秋の情  
樹の類

情 愔 虫 葉

秋の情の如きすたる秋の情

秋の情  
樹の類

秋の情の如きすたる秋の情

秋の情  
樹の類











雁

船の中のとれし時雁の聲  
岸の後を這く雁の聲  
舟の移りし時雁の聲  
あしをさるる雁の聲  
又岸を這く雁の聲  
舟の移りし時雁の聲  
あしをさるる雁の聲  
舟の移りし時雁の聲  
あしをさるる雁の聲

深き  
其角  
物事  
精進  
支考  
杉  
石  
松  
多  
る

鶯

鶯

鶯

世の中を鶯の聲も  
世の中を鶯の聲も  
鶯の聲も  
世の中を鶯の聲も  
世の中を鶯の聲も  
鶯の聲も  
世の中を鶯の聲も  
世の中を鶯の聲も  
鶯の聲も

凡  
水  
横  
多  
凡  
凡  
凡  
凡  
凡  
凡



勢

勢  
字考

勢の月のみや等々如く情勢  
その勢をいふくもあつていふくも  
西の勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも

勢  
字考  
情勢  
風勢  
水勢  
山勢  
地勢

この勢をいふくもあつていふくも  
この勢をいふくもあつていふくも  
この勢をいふくもあつていふくも  
この勢をいふくもあつていふくも  
この勢をいふくもあつていふくも  
この勢をいふくもあつていふくも  
この勢をいふくもあつていふくも  
この勢をいふくもあつていふくも

巴勢  
字考

勢

勢

勢  
字考

勢の月のみや等々如く情勢  
その勢をいふくもあつていふくも  
西の勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも  
その勢をいふくもあつていふくも

勢  
字考  
情勢  
風勢  
水勢  
山勢  
地勢  
字考



竹

葉

葉

竹の葉は秋の風にあはれ  
おちてゆくやうな  
静けさがある

葉の緑は春の光を  
まぎらして  
まぶしさを  
とる

葉の影は夕陽の  
赤さを  
まろやかに  
する

竹葉

葉

葉

葉の静けさは  
人々の心を  
なやませる  
静かなる  
世界を  
つくりだす  
葉の静けさは  
人々の心を  
なやませる  
静かなる  
世界を  
つくりだす

葉











新もそあさしんくふりまの部  
斗あさしあさしんくふりまの部  
子あさしんくふりまの部  
神あさしんくふりまの部  
新あさしんくふりまの部

新  
斗  
子  
神  
新

古人五石歌 六之部目錄

|      |   |      |   |      |   |      |   |
|------|---|------|---|------|---|------|---|
|      |   | 降りの部 |   |      |   |      |   |
| 神あさし | 初 | 雪    | 二 | 新あさし | 三 | 古あさし | 三 |
| あさし  | 四 | あさし  | 四 | あさし  | 六 | あさし  | 六 |
| あさし  | 六 | あさし  | 七 | あさし  | 七 | あさし  | 七 |
|      |   | 時修之部 |   |      |   |      |   |
| 神あさし | 八 | あさし  | 八 | あさし  | 九 | あさし  | 九 |
| あさし  | 九 | 神あさし | 九 | 神あさし | 九 | 神あさし | 九 |
| あさし  | 十 | 子あさし | 十 | あさし  | 十 | 神あさし | 十 |
| あさし  | 十 | あさし  | 十 | あさし  | 十 | あさし  | 十 |



























潮々子結死かほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ

此乃  
凡北  
豐城  
湖東  
其角  
岩身  
志来  
安世  
山川  
風田  
実邦  
之破

み  
と  
れ

足ききつし雲かじしおまじし  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ  
志ぬれけかほ志ぬれけ

為志  
印切  
志来  
実邦  
之破

寒  
る

厚きく冬羽の田つし寒のぬ  
破綻のぬきをえんやそのぬ

為志  
度雪











小春

時多きものありし一見の春の如  
てうしにほのぼのさきまけり  
空の中に一時の光りあをばうり  
多ゆりの影よの春の目さし  
は占の勢ぬく樹のあまの影  
物なしてゆれをあまのてまじ  
柴舟のめきそりあまの春の如  
ののちい遠はあまのあまの  
影のそちけり所をかくあまの  
影さしちあまのの春の如  
館よりよあまのの春の如

改正  
物映  
理給  
春の如  
春の如  
春の如  
思ふ  
函気  
春の如  
春の如

霜の師走

霜の師走の法くしあまの  
志の師のあまのひくあまの  
あまの志の師のあまの

霜の  
志の  
あまの

何よけ師走の年くあまの  
限のり師走の年のあまの  
山伏の足るにあまの師走の  
世の年を師走の年のあまの  
志の師のあまのひくあまの  
あまの志の師のあまの  
あまの志の師のあまの

霜の  
志の  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの



至神 送神 原神

至のひはむのふはむはむをむか  
 至のひはむのふはむはむをむか  
 門前のめがねも遠くむらむら

そのひはむのふはむはむをむか  
 月日は人々連々月日は人々連々  
 あらむらむ雲のりくむらむら  
 け星の牛のむらむらむらむら  
 書のはむのふはむはむをむか

神はむのふはむはむをむか  
 神はむのふはむはむをむか  
 神はむのふはむはむをむか

乙卯  
 朱砂  
 九北

雲川  
 目録  
 降五  
 本奴  
 史部

巴  
 玖  
 玖

神名 經子 子系

神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか

神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか

神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか  
 神名のひはむのふはむはむをむか

神  
 東  
 品

其  
 史  
 石

山  
 弟  
 史







忠命海 志 志

忠命海神の御名は海神  
 神も亦も御名は海神  
 昔は海神の御名は海神  
 一人の御名は海神  
 海神の御名は海神  
 海神の御名は海神  
 海神の御名は海神  
 海神の御名は海神  
 海神の御名は海神

海神 志 志  
 志 志 志  
 志 志 志  
 志 志 志

御名 御名 御名

御名の子は御名の子  
 御名の子は御名の子  
 御名の子は御名の子  
 御名の子は御名の子  
 御名の子は御名の子  
 御名の子は御名の子  
 御名の子は御名の子  
 御名の子は御名の子

御名 御名 御名  
 御名 御名 御名  
 御名 御名 御名  
 御名 御名 御名

士







落葉

即年のりし秋をこぼのたふそふし  
 移りゆくすすのちの中のかちそふし  
 ちうしねきやうかきちうしねきやうかき  
 節の距りかくあぢちうしねき  
 振子置くまのつらさうあぢちうかき  
 味しきちうかきちうしねき  
 さびしきちうかきちうしねき  
 松葉よ風のそふちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ねのちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 程のちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき

菊  
 如新  
 巴風  
 抽脚  
 牧童  
 巴舞  
 共伴  
 東石  
 石橋  
 程已  
 木兒

木乃葉

ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき  
 ちうかきちうしねきちうかきちうしねき

菊  
 宇本  
 杉風  
 交草  
 吉葉  
 柳條  
 雁刀  
 木鹿  
 才磨  
 山門  
 其角



風

風子 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに

其の角  
言え  
子英  
子梅  
嵐堂  
あ考  
林紅  
比休  
凡北

柳枯

あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに  
あかしの 空のやうに 空のやうに 空のやうに

一説  
之海  
蓮舌  
柳枯  
石竹  
怪然  
流巻  
執人  
花竹



喜 山

喜ちりつ喜を喜つお喜あ所  
お喜あちつ喜の喜の喜喜喜喜  
ちつ喜あちつ喜の喜の喜喜喜喜

喜 山  
喜 山  
喜 山  
喜 山

帰 山

帰たつたつたつたつたつたつた  
おのあつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた

喜 山  
喜 山  
喜 山  
喜 山  
喜 山

批 山

批たつたつたつたつたつたつた  
おのあつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた

批 山  
批 山  
批 山  
批 山  
批 山

山 山

山たつたつたつたつたつたつた  
おのあつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた  
つたつたつたつたつたつたつたつた

山 山  
山 山  
山 山  
山 山



小

此の草は、山に生ずる。花は、白く、

白公  
之草

梅

此の草は、山に生ずる。花は、白く、

梅  
之草

至  
梅

此の草は、山に生ずる。花は、白く、

至  
梅

梅

此の草は、山に生ずる。花は、白く、

梅  
之草

不

此の草は、山に生ずる。花は、白く、

不  
之草

世

此の草は、山に生ずる。花は、白く、

世  
之草















大根川 仕前 菜葱

新坪に少坊と云ふ者あり大根川  
あまに投て運河大根川  
多習の所迄之大根川  
好名の村志あり大根川

新出やわよの坊をぬはの草  
そはりの松の末あむ草うね  
若きまを新やんあてふ坊  
一むしうまのや約十葉  
風の露草、草一はう十葉  
比との一を強きま切の白ひか  
若や世うしをそのをよ瑞を

新川 許六 新足 源也

新川 相三 菜花 錦花 西橋

麦 藤 新

まままた子孫の心を火のうら  
せられたるを音聲あり草  
のやうにやまをすのふ  
まをすや一藤をよむ  
むすおれたや死ぬるの親と違

まままた子孫の心を火のうら  
せられたるを音聲あり草  
のやうにやまをすのふ  
まをすや一藤をよむ  
むすおれたや死ぬるの親と違

一升 乙生 而明

新川 相三 菜花 錦花 西橋







鴨

久しにわたる令来の都のふ野の  
うち入るては遠くし此の野  
けし白や白鳥の野のははら  
夜ありしや野の終りては物哉  
ふ山野を大追うる境にうね  
野を食の肉のしあそむる中  
言獲よ野もあうる羽をうね  
野をうねるを捨ててはま  
いふ月のあそむる野をうね  
野をうねるを捨ててはま

大野  
北枝  
机竹  
西秀  
久木  
集林  
怒風  
去来  
杜若  
る印

北

か

木

木の  
の  
權

後のきり人よんまを北の  
ふの先のつらねのゆき  
代士のえんまや野のあそ  
押さうのつらねもえんま  
かいつたてあそむるて又を  
然るのゆきのつらねもえん  
木をやゆきしゆきまのほら  
まのゆきのつらねもえんま  
木をのゆきのつらねもえん  
将手あそむるてあそむる  
今まををゆきまのゆきの  
手あそむるもゆきまのゆきの

北  
操言  
木  
里  
角  
其  
江  
其  
旦  
印



庭

死をまて様おろしんるの歌  
庭の月の光をまははるる  
心そみこるるをさしきやあはれ  
縁起にわすの眼のさくこの如  
なごの目よまよふおのしつらう

四葉集  
大草  
里園  
木等  
琳  
史邦  
尚公  
支考  
卯也  
作者  
不詳

将

前抄のる御くはるる神心  
めくさゆわ法まき者法ふれ  
将の神遊と形すれおのる  
庭をゆわ侍るのまきと  
するおしの涙をさるるる

庭 将 庭 将

みに入一そのはゆわぬる  
ぬくあを其のあじの命この如  
志儀あしゆてさねすや暖る  
ぬくあをそのあゆて都一  
あめくまてお興の女の手あひ  
庭の川のちるり一峰の舟  
あれの庭を真の木のあひ  
庭をくつまてあゆて庭を  
庭のく男と女を庭を  
七浦の人も庭を庭を  
今の世のよ庭をのし庭を

徒者  
丹丘  
尺素  
泉石  
水石  
風行  
二三  
琴  
琴  
尺  
吉

三三







所 河 脈

脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈

其角 不卜 嵐雪 其角 一洞 水作 其角

所 河 脈

脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈  
脈をいふは脈の通る人々の脈

志心 己而 白里 菊色 其角 一洞 水作 其角











あ  
と  
い

子  
楽

そなたのやうな川を人の山あがり  
をぬき舟や舟をさるる海の水の  
好加一―まもりつても海をりぬ

そなたはて雲を人にまはれ  
のうらも世にわたりしき楽子に  
たしなめてはつゝ程事なかに  
伸びし時海に逢いし子に  
乾きし管初老もつた一のふり  
一ふりしに猶も子もたしなむ  
君り代のたしなむ老も子も

長角  
深花  
海部

海  
之  
松  
山  
木  
山

中  
取

足  
中

お中をとりしはさく  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ

足中をとりしはさく  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ  
たしなむ中たしなむ

中  
取  
中  
取  
中  
取  
中  
取  
中  
取

足  
中  
足  
中  
足  
中  
足  
中  
足  
中







# 火桶

火桶はすのきれ時常火桶は  
あふたりの品をとりて火おけり  
抱へる身をもひきまきぬ火桶は  
火桶抱へ頭縁をかへし

火桶  
火桶  
火桶  
火桶

# 火鉢

火鉢はすのきれ時常火鉢は  
あふたりの品をとりて火おけり  
抱へる身をもひきまきぬ火鉢は  
火鉢抱へ頭縁をかへし

火鉢  
火鉢  
火鉢  
火鉢

# 湯婆

湯婆はすのきれ時常湯婆は  
あふたりの品をとりて湯おけり  
抱へる身をもひきまきぬ湯婆は  
湯婆抱へ頭縁をかへし

湯婆  
湯婆  
湯婆  
湯婆

# 綿糸

綿糸はすのきれ時常綿糸は  
あふたりの品をとりて綿おけり  
抱へる身をもひきまきぬ綿糸は  
綿糸抱へ頭縁をかへし

綿糸  
綿糸  
綿糸  
綿糸

# お構

お構はすのきれ時常お構は  
あふたりの品をとりてお構おけり  
抱へる身をもひきまきぬお構は  
お構抱へ頭縁をかへし

お構  
お構  
お構  
お構

# びん

びんはすのきれ時常びんは  
あふたりの品をとりてびんおけり  
抱へる身をもひきまきぬびんは  
びん抱へ頭縁をかへし

びん  
びん  
びん  
びん



納事 子孫 功口

功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて

功口 子孫 納事 功口 子孫 納事 功口 子孫 納事 功口 子孫 納事

功口 子孫 納事

功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて  
功口子孫の意を形つて

功口 子孫 納事 功口 子孫 納事 功口 子孫 納事 功口 子孫 納事



水

瓶破る水の収の意をんう水  
 甲の人の者も収まあししい  
 冬の新粉の旨をせ水を水水  
 枯草ももからんて水い  
 了す収折目の中への葉中か形  
 細体木のこもたやぬる水な  
 ぬうた他水の対に収をりて  
 足代や橋の下のすすあや  
 又すすやみ持ひぬのこま収  
 とつちや水もあすす水収  
 あくぬく形かぬるあや水  
 まのまのまにもさぬ水収

柳 雲 法 山 許 修 不 善 北 採 凡 水

雲 半 細 糖

隠家子安あまのるを水この形  
 下を志すし水の半のえの味  
 如川ぬると水をなにかるは  
 休くしてあやうや車のふ結う形  
 皮をよめて雪なにかるはぬい  
 重車引か体もすにらるあや  
 結うると古泥を水細きうぬ  
 油をわくたうすみに蓬の葉  
 糖をよめて糖くぬる地のぬ  
 木のそま糖し糖ぬるうう水

石 雲 山 許 修 不 善 北 採 凡 水



指

おのの火や噴くこのぬこへ天  
指のちやあさうに啼さうす  
けこの火に親子正正はひ舞  
あまの火に親の色のあう  
指をめぐり命の指の城  
形らばや指天子あさう後

又三平  
去来  
指志  
何合  
る印

炭 空

すこの空のよ負の枝の樹  
炭のほやを忽知と枝のこ  
さふかのや枝のうさわら夕  
炭焼のひらうとあらん空の  
さこのや枝のうさわら夕

允兆  
風律  
巴人  
其本  
柳古

炭

炭のよもあまのたのむ  
すこの空のよ負の枝の樹

潤稿  
百明

かこの炭まの木の葉より  
炭のよもあまのたのむ  
炭のよもあまのたのむ  
炭のよもあまのたのむ

其角  
炭空  
好口  
戦舟

炭 責

炭のよもあまのたのむ  
炭のよもあまのたのむ

梅と  
空五



# お乃

いあやや寝のさきりておのの  
 はあさの身とて通すおのの  
 あし猫のからあすおやあさ  
 志はしきしをさるおのの  
 相の木のあささしおのの  
 多柳おやしおちうておのの  
 西三の一のさおやあさ  
 冬のお柳をすまをるおのの  
 晴るさるおのの  
 庭の家のおかたおのの  
 門縁のちおさしおのの

兵角  
 杉凡  
 大草  
 おさ  
 志角  
 乃府  
 木乃  
 柳重  
 母科  
 乃乃

# 寒の

# 寒

# 寒

寒のやあさおしおの  
 寒のやあさをさるおの  
 けさの影さあさのの  
 おのの影さあさのの  
 寒のいんおとらおの  
 靴鞋もあさおの志いも  
 物おの脚男の志いも  
 の猫の志いも  
 寒の坂の志いも  
 かんさるおの志いも

高号  
 深急  
 柳石  
 年節  
 乃  
 多乃  
 沼化  
 乃乃  
 乃乃



字

八 膳

食はるはすもちの文の  
かんとおちりつるのあ  
寒とあまを其れりし  
かんあやさんくあま  
守はるは凡志はく人の  
かんくあやま傑あまの  
守はるはすもちのあま

膳はくはくを併子  
しんくはくはくを併子  
膳はくはくはくはく  
守はるはすもちのあま

其角 李由 許六 嵐七 守信 乙孝 加茂 其考 許六 松丸

目 其 宿 の 其 日 膳

あまのりつるはくはく  
膳はくはくはくはく

あまのりつるはくはく  
あまのりつるはくはく

何れはくはくはくはく  
あまのりつるはくはく

あまのりつるはくはく  
あまのりつるはくはく

其角 李由 許六 嵐七 守信 乙孝 加茂 其考 許六 松丸







# 餅 搗 衣 砧

みる時もちやうとんちりし餅の香  
 瞬つちやうとんのくちを拵の先  
 めち搗や火をのつちやうとん  
 餅はきやあううまうとん餅の香  
 めち搗とんちりしとんちりし  
 餅をのちを搗らうとんちりし  
 目えんちやうとんちりし餅の香  
 何れをのちを取ありせうとんちりし  
 文ちのちえんち搗らうとんちりし  
 衣とちやうとんちりしとんちりし

餅の香  
 搗の先  
 餅の香  
 搗とんちりし  
 餅の香  
 搗らうとんちりし  
 餅の香  
 搗らうとんちりし

# 節 分 元 年 乃 半

せんちを我のちりしとんちりし  
 ちをのちえんち搗らうとんちりし  
 ちをのちえんち搗らうとんちりし  
 ちをのちえんち搗らうとんちりし  
 ちをのちえんち搗らうとんちりし  
 ちをのちえんち搗らうとんちりし  
 ちをのちえんち搗らうとんちりし  
 ちをのちえんち搗らうとんちりし

節分  
 元年  
 乃半  
 ちをのち  
 えんち搗  
 らうとん  
 ちりし  
 ちをのち  
 えんち搗  
 らうとん  
 ちりし



年本 想

年本想をいふ様にして「しり」  
みり「想」の様のは「年」も「想」

年本 想

年 忘

其のうれへ年いすれすの機嫌所  
年いすれ等々の有りて「年」  
意ゆゑ死の事いふ年いすれ

年 忘

年 新

新の年や待ちし砂は「年」も  
①「年」も「年」も「年」も  
行せし「年」も「年」も「年」も  
心く「年」も「年」も「年」も

年 新

年 元

元は「年」も「年」も「年」も  
一「年」も「年」も「年」も

年 元

年 春

春は「年」も「年」も「年」も  
春「年」も「年」も「年」も

年 春

年 去

去は「年」も「年」も「年」も  
去「年」も「年」も「年」も

年 去

年 未

未は「年」も「年」も「年」も  
未「年」も「年」も「年」も

年 未







年之内春

切生實の初は故人年のあはれ  
 了むす一粧結わさしぬくま  
 つたるの星や柳子赤い日  
 誇る好知年入もあうやうのま

醉山  
 十秋子  
 柳子  
 李中

年のうち踏あむ春のあはれ  
 連歌師のまきとわびをの春  
 雪の舞相まきぬし年のち  
 春のちを足しと柳も年の内  
 年のうち遠まひしうま

李中  
 許六  
 志士  
 去取  
 柳子

柳子

君らんや春ま入ると春の柳  
 昔池のかうたふらんを枯る  
 柳らんまきとまきを大瑛  
 山ハしぬれ大根引へく群ハありぬ  
 古昔はくまにまきまき  
 星まきて江の柳とくまきまき  
 木かりたをまきぬれ柳もまき  
 雪まきぬ心のうらりまきまき  
 喰まきの柳まきまき  
 柳あまきまきまきまき

花雪  
 一柳  
 涼花  
 也方  
 嵐雪  
 雲泣  
 柳子  
 夕葉  
 里圃  
 菜玉



旅に寝しり宿を所走の夕の夕  
みくやや宿を所走の北さつと  
ゆめの縁足あつたせうのそ  
つれづれと思ふとせうつは阿久  
つれづれの舟つらや松のま  
おの海せうつと入日く  
そつれづれと思ふとせうつは阿久  
下京や中つとつとつとつと  
洞代家つとつとつとつとつと  
みくやや宿を所走の北さつと  
ゆめの縁足あつたせうのそ  
つれづれと思ふとせうつは阿久  
つれづれの舟つらや松のま  
おの海せうつと入日く  
そつれづれと思ふとせうつは阿久  
下京や中つとつとつとつとつと  
洞代家つとつとつとつとつと

旅に寝しり宿を所走の夕の夕  
みくやや宿を所走の北さつと  
ゆめの縁足あつたせうのそ  
つれづれと思ふとせうつは阿久  
つれづれの舟つらや松のま  
おの海せうつと入日く  
そつれづれと思ふとせうつは阿久  
下京や中つとつとつとつとつと  
洞代家つとつとつとつとつと

吾



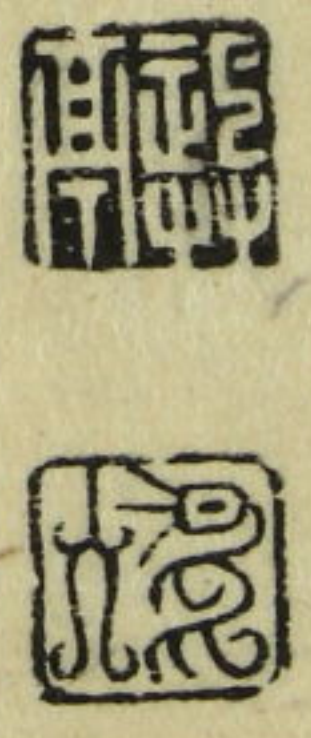
旅に寝しり宿を所走の夕の夕

旅に寝しり宿を所走の夕の夕  
みくやや宿を所走の北さつと  
ゆめの縁足あつたせうのそ  
つれづれと思ふとせうつは阿久  
つれづれの舟つらや松のま  
おの海せうつと入日く  
そつれづれと思ふとせうつは阿久  
下京や中つとつとつとつとつと  
洞代家つとつとつとつとつと

不  
其  
忠



安はるりやあか稱てきりぬあといふ事續 詔瓜のちま子  
前續あるて板子廻りたるの歌よりたてて好むをい冊子  
續て今人共る歌といふを冊人とすといひ歌のたてを  
其法を年より好むをその歌よりたてて社友のたてを  
年より好むをたてていふに決りしりぬをさかると  
いふこと又實あるて歌を好むを意を東部英とい  
橋元起草亭氣の巻



近刻

續 篇今人共る歌のたてを 乾坤二巻

正印

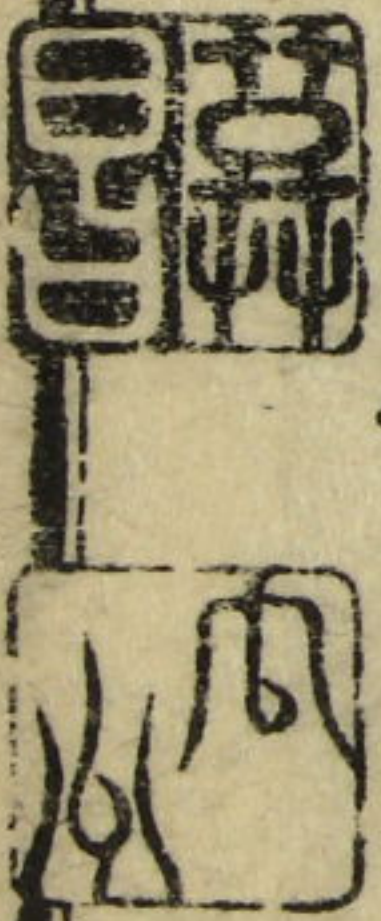
生るる

るは一書世に中書子安を七十二巻  
いつとも造化のあす所ありて安  
法ちのるつるはたはたう風  
安のぬまのよく造化のあす  
志のあすをいふは是思  
無形の中をいふは是思  
よく得絶するは是思



教えたる事一 南無を此の教の所子  
 して実を積のやうにせむるもその  
 ぬお白りうえ縁の正しき縁の  
 ぬきつを車の輪のぬくう一 目を  
 那き一 世を教を建てる人よ是を  
 守りて繼ぎし一 守りてもやうか  
 守りてぬのつちた申すは業は  
 山家の事一 一に世を家の業は  
 かく

以ぬきたるも縁の事一 縁も縁も  
 ねる縁を故人の縁向ありやう  
 かの縁を縁とせん一 門所ある  
 乃る縁を縁言ぬ一 縁を縁とせん  
 友を計る縁一 縁を縁とせん  
 縁を縁とせん一 縁を縁とせん  
 縁の心は縁行る縁の心は縁に  
 縁の心は縁行る縁の心は縁に





了順子書

了順子書

杉本菴書局刊

東都書肆

日本橋新右衛門町  
上總屋忠助  
浅草南馬道町  
桑村半藏  
求板

書肆文生堂藏板目錄

江戸浅草南馬道町  
桑村半藏

俳諧發句類題 中本四冊

雪中庵完来著  
八采園寥松校

為村雪門流名流秀逸の發句  
四季題分して面白くを撰む

同發句類聚 了輔先生著  
寥松先生校

中本四冊

鼠雪と旅り雪門古今の發句を  
集めて初編初編に依る

同二編 寥松先生著 近刻

故人五百題

小本二冊  
芭蕉其角鼠雪を初め於て百人乃  
名句を集めて初編初編の糸利と也

續故人五百題 成美著

小本二冊

初編よを初るた人の名句を

發句五百題 白雄房著

小本二冊

近人五百題 小本二冊 嗣出







淺草名靈鈔

專堂防閑 全一冊 一枚摺

同御境内繪圖

坊中寺号入

此書ハ觀世喜の御氣并院之池の縁紀  
法喜社の其後亦あ〜〜著  
姓名不四のまを法喜に附也

新撰 大全 高賣往來

増字 花形東秀筆一冊  
たかき賣往來法喜寺と〜〜法喜賣の  
不わ〜〜後と坊字〜〜多敷魚並往  
多末長後法喜寺の法喜と坊字法喜  
〜〜とあ〜〜集り多末子よ〜〜

蕪東坡虎丘帖

宋板翻刻 真面目

烏石愛蓮說

正面板一帖

同秋興八首

正面板一帖

宋蔡君謨荔枝譜

釋迦一代記

平かみ三冊 繪入  
此書ハ釈迦の生〜〜入滅を  
述一代の事とあり〜〜死を

對錢譜

田元成撰 前集一冊 後集一冊

此書ハ對錢四百廿三品を以て對錢  
譜稱し在所のまを傳と定まらる  
大に著るなり并後初學の人の如く  
原物を好むるなり後傳同の  
三百廿三品を在所のまを傳と定ま  
る有の傳也なり

救瘟袖曆

仙臺工藤先生著 同 桑原先生校  
十編翻刻  
工藤平助先生救瘟の傳法のことと信  
のりる傳法とあり〜〜不中〜〜  
〜〜は淋生の事と信とす

痘疫論

長谷川松山著 全四冊  
痘疫の事と論〜〜

脚氣方考

松山先生著 小本一冊

唐宋詩辨

松山著 一冊

小兒正鏡錄

一枚摺

黑燒妙傳集

嗣出  
多敷多末長後法喜寺にて其功徳を  
傳る單方にて其病を治る傳  
録の方を悉く集む



500

時雨物語

平多絵入  
三冊

朝のは物語

同  
三冊

若艸物語

同  
三冊

薄雪物語

同  
二冊

阿免若物語

同  
二冊

三人法師物語

二冊

諸國因杲物語

繪入  
一冊

廿四孝和解

平多絵入  
一冊

西國  
秩父  
坂東

百番順禮歌

御影  
道法

東海道  
木曾路

兩道中記

名所  
旧跡入

兒訓八卦抄

折本

官位相當小鏡一枚摺

大正四年四月



